

世界詩人全集

1

ゲーテ詩集

大山定一訳

新潮社

世界詩人全集 1

ゲーテ詩集

昭和四十二年十月十五日印刷
昭和四十二年十月二十日発行

価五〇〇円

訳者 大山 定一

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話(280)二二撥替東京八六

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 新宿 加藤製本所



(乱丁、落丁本はおと
りかえいたします)

〈第1回配本〉

目次

詩と小曲

おさない少女のねがい	二
少女の叫び	三
美しい夜	三
きみを愛してるかどうか	四
五月の歌	五
フリーデリーケに	六
花模様のリボンにそえて	六
歓会と別離	七
野ばら	七
すみれ	七
めくら鬼	八
クリステル	八
新しい恋 新しい生	九
ペリンデに	九

二 三 三 四 五 六 六 七 七 八 九 九

湖上	一〇
山上から	一〇
秋思	一〇
憂愁のよろこび	一一
獵人の夜の歌	一一
シュタイン夫人に	一二
わたしたちに、なぜ……	一二
月に寄す	一三
旅びとの夜の歌（一）	一四
旅びとの夜の歌（二）	一五
妖精の歌	一五
無風	一六
順風	一六
遠い恋人に	一七
回心	一七
みれん	一八
羊飼いのなげきの歌	一九

一〇 一〇 一〇 一一 一一 一二 一二 一三 一四 一五 一五 一六 一六 一七 一七 一八 一九

五月の歌

スイス民謡調

遍照

見出でしは

夜思

情熱の三部曲

ウエルテルに

悲歌

和解

ドイツ・支那歳時記から

花びらは白ゆりの星の……

わしの静かなよろこびを……

夕やみがしずかに……

満月に

ドロンブルクにて

しろがねの真昼は……

六

五

五

七

七

七

七

六

六

六

六

六

六

六

六

六

雑詩とバラッド

マホメットを歌う

プロメートイスの歌

ガニユメート

馱者クロノスに

巡礼の朝の歌

ハルツの冬の旅

舞踏への誘い

漁夫

魔王

鼠捕り

神と舞ひめ

「ウィルヘルム・マイスター」から

ミニョンの歌(一)

ミニョンの歌(二)

ミニョンの歌(三)

七

一〇

一〇

一〇

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一

堅琴弾きの歌 (一)

一四

エビレマ

一七〇

堅琴弾きの歌 (二)

一四

もし肉眼に太陽のひかりが……

一七一

堅琴弾きの歌 (三)

一四

数知れぬ書物のなかに……

一七二

「ファウスト」から

一四

ぼくのために君らは……

一七三

グレートヘンの歌

一四

池には氷がいっぱい……

一七四

メフィストの歌

一五

比喩

一七五

トゥーレの王

一五

詩は教会の窓の……

一七六

羊飼いの歌

一五

ツォイスよ、なぜわたしは……

一七六

ねずみの歌

一五

西東詩集

のみの歌

一六

「ズライカの巻」から

一七

リンコイスの歌

一六

「機会がぬすびとをつくる」……

一七

エビグラム

臆病な考えや……

一六

あなたの愛につつまれて……

一八〇

わたしたちはどこから……

一六

これがうつつだろるか！……

一八一

芸術家よ、ただ造形せよ！……

一六

ユーフラテスの河に……

一八二

一体外部から世界をうごかす……

一六

殿方の目をわたしは……

一八三

いちよりの葉

一八七

- あなたはかずかずの詩を…… 一六
 太陽がのぼる…… 一七
 恋人よ、ぼくのターバンを…… 一八
 ごくわずかなもので…… 一九
 ぼくがつまらぬ躊躇など…… 二〇
 きれいに、清書して…… 二一
 庶民も奴隷も支配者も…… 二二
 うつくしい豊かな髪の毛よ…… 二三
 たとえば東洋と西洋…… 二四
 こなごなに砕かれた…… 二五
 ああ、人間の感覚は…… 二六
 どんなに遠く離れていても…… 二七
 梢の細枝に…… 二八
 白糸をかけたように…… 二九
 人々はいう、ペーラムグール王が…… 三〇
 その黒い眸に、その紅い唇に…… 三一
 そよそよと、やさしくそよぐ…… 三二

莊嚴図

二四

反響

二六

西風よ、おまえの湿ったそよぎが……

二七

再会

二九

満月の夜

三三

暗号通信

三四

映像

三六

言いようのないよろこびで……

三八

むかしアレクサンダー大王は……

三〇

世界はじつにすばらしい……

三一

どんなものに身を変えても……

三二

「酌童の巻」から

ぼくは酒場で飲んだ……

三三

ぼくはひとりだ……

三五

コーランが神さまとともに……

三六

ぼくらはみんな酔わねばならぬ……

三七

もうつべこべ言うのはよせ……

三三

怒濤さかまく荒海のなかへ……

三三

しらふのときは……

三六

溺れる

三三

あなたは どうして時々……

三九

しろたえの紙のうえに……

三四

肉体が牢獄なら……

四〇

鱗合歓喜

三六

酩酊のために……

四二

☆

夜あけの酒場は……

四三

解説

(大山定一)

三〇

いったい、どうしたことで……

四四

ゲーテ年譜

六八

海千山千の……

四六

先生が市場の人ごみを通ると……

四七

先生が酔っぱらうと……

四九

夏の夜

五一

遺稿と他の卷々から

ヘジラ (遁走)

三七

独立不羈

三〇

護符

六一

暗黒のはてなき……

六一

ゲ
ー
テ
詩
集

ありとあらゆるものを神々はさずけた。
無限の神々は、愛する者に一切をあたえた。
あらゆる歓喜のかぎりなきものを、
あらゆる苦難のかぎりなきものを、
ことごとく。

詩
と
小
曲

木に書きたる歌なれば、
しずかに河岸をながれゆけ。

おさない少女のねがい

どうしてもわたし

お聲こゑさんがほしいの。

なんて、すてきでしょう。

わたしはマダムと呼んでもらえるし、

お針のおけいこにも、学校にも、

行かずにすむわ。

何人もお手伝いさんがいて、

叱ちったり命令したりできるんですもの。

洋服屋さんを呼ばせると、

お洋服だってすぐに出来るでしょう。

お散歩をして、

舞踏会へ行って——

いちいち、何をするにも、

パパやママのお許しがいららないんですもの。

Wunsch eines kleinen Mädchens

少女の叫び

ぼくは少女のあとをつけた。

森のなかでうまくかの女の腕を

つかまえた。少女はいった。

「放さないよ、大声を出すわよ」

ぼくは傲慢にどなりかえした。

「邪魔者は殺してやる」

すると、かの女はそっと流し目でぼくを見ながらささやいた。

「しっ！ たれかに聞えると悪いわ」

Das Schreien

美しい夜

恋しいひとの家から

わかれを告げて、

ぼくはしずかな足どりで

暗い人影のない森をあるく。

かしの木の茂みに月がさし、

そよ風がほおを撫で、

ぶなの木は葉をそよがせながら

甘いかおりを撒きちらす。

ぼくはすずしい森の小みちで、

夏の夜の美しさを満喫する。

あたりの静けさのなかで、

ほのぼのと魂をつつむ幸福を感じる。

このいいようのない深いよろこび。

だが、神よ、ぼくは美しい夜を

千でも万でもあなたに返上する。

恋人があたえてくれるただ一夜のためなれば。



Die schöne Nacht

きみを愛してるかどうか、ぼくは知らない。

一目ただ、きみの顔を見ただけで、

ふときみの黒い眸をのぞいただけで、

ぼくの胸から悩みや苦しみが消えてしまう。

もう心のなかが明るさでいっぱいだ。

きみを愛してるかどうか、ぼくは知らない。

Ob ich dich liebe